研究者の恋
――ガブリエーレ・モロッリ先生の思い出――

菅野（すげの）　裕子

2006-07年、フィレンツェ大学での在外研究でガブリエーレ・モロッリ（Gabriele Morolli）先生にご指導いただく機会に恵まれた。先生が急逝されてから今年で10年になる。ルネサンス建築の研究者としてはあまりにも高名な先生だが、教育者としての姿はそれほど知られていないのではないだろうか。ここでは古典主義建築についての講義や先生との思い出を綴ってみたい。

古典主義建築のオーダーというとドリス式やイオニア式の柱頭までは見分けやすいが、実際にはそれ以外の細部にもさまざまな違いがある。授業ではドラム式のスライドでカルロ・アントニーニ版のヴィニョーラの図版を1枚ずつ大写しにして、まずそこに描かれている形1つ1つの名称や語源について説明され、さらに形としての作用についても解説を加えられた。たとえば、古典主義建築で用いられる繰型の、正シーマと反シーマ。どちらも反転曲線で双子のようによく似ているが、正シーマの方がより丁寧な形である、なぜならこちらの方が1つの段差を接続させるのに繰型の数が多く必要になり、手間もかかるから。こんな具合にすみずみまで丁寧に説明されるので、授業は1枚の図版に1、2時間かけるスピードでゆっくりと進んでいった。

先生の話し方は大きな抑揚がついた典型的なトスカナ風のもので、低く柔らかい声が教室に心地よく響いた。板書では、さっときれいな絵を描かれた。その講義が始まったのは2月、当時フィレンツェ大学の講義室はほとんど暖房がきいてなかったので、しんしんと冷えきった教室の中、学生たちは（そして先生も）厚手のコート姿のままで、先生の情熱的な語り口に引き込まれていた。

5つのオーダーを一通り終えたころには春が訪れていて、フィレンツェの建築見学に連れて下さった。なにしろ大学を1歩出れば、サン・ロレンツォ聖堂もウフィツィも本物がそこに建っている。なんと幸せなことだろう。先生は建築の前に立つと、目の前に見えるファサードについて、一気に1時間、ときには1時間半ものあいだ話される。その言葉に必死に耳を傾けていると、いつもまるで魔法のように、目の前の建築が突然生きた姿へと変身するように感じられる瞬間があった。

当時の先生が口癖のように繰り返されていたのが、「人間の目は知っているものしか見ない」という言葉だ。見学先でディテールの説明になると、話を止めてはこの言葉をおっしゃると、ほら、前に見えなかったものが、今は君たちにも見えているだろう？と呼びかけられた。本当にその通りで、冬の講義のおかげで、細部まで何もかもはっきり見える。しかもそれらすべてが1つの身体のように有機的につながっていることが実感できる。まるで別の建物を見ているようだった。周りの学生たちも目を輝かせて頷いていた。

こんなにすばらしい授業だったのに、学生数は多くて6人、欠席が多い日は3人ほどしかいなかったのは未だに不思議だ。ただ、人数が少ないので質問もしやすく、書いたものを持っていっては読んでいただいた。日本の伝統的建築について書いたときは、一緒に研究室で読みましょうとおっしゃって1ページずつ丁寧にコメントを下さった。書院造の欄間に関する説明で、「襖を外して部屋と部屋が連続的に使われるときでも、欄間は部屋の境として留まる。だが逆に、襖が閉じられたときには、この欄間を通して襖の向こう側の空間との連続性が感じられる」と書いたくだりを読まれると、これはすばらしい、いつか見に行ってみたいとおっしゃった。そのとき気づかされたのは、先生はイタリアのルネサンス建築だけでなく、イタリア以外の文化にも、そして何より建築文化そのものに対して、深い関心と敬意を持たれているということだった。その少しあとには、今度日本に行くチャンスがあるかも知れないんだよ、とおっしゃったこともあった。今となっては永遠に叶わない夢となってしまったけれど、そのときはただうれしいばかりだった。ピッティ宮を訪れていたその日はすばらしい快晴で、庭園の高台からはフィレンツェの町が輝いて見えていた。

帰国が近づいたある日、初めてイタリアを訪れたときの話になったことがある。15年前、学生時代の旅行でイタリアの建築に圧倒され、特にフィレンツェの町の美しさに心を打たれたこと。それからイタリア語の勉強を開始し、ようやく今フィレンツェ大学に来ることができたこと――すると先生は、はっとした表情をされ、そうか、君のルネサンス建築に対するinnamoramentoは一朝一夕のものではないのだね、とおっしゃった。直訳すれば「恋すること」を意味するこの言葉に一瞬驚いたが、考えてみるとぴったりな表現だと思う。小さな憧れだったものが、学習を重ね、対象をより深く知ることで心の中で成長し、やがてその人の人生そのものを塗り替えていくほどの存在になる。研究とはまさにそういうものであることを、先生ご自身が人生で体現されていたのだろう。